徳島新聞　平成26年6月5日

時評とくしま

競争で失う本当の学び

全国学力テスト

山崎　勝之
鳴門教育大学大学院教授

今年も全国学力テスト（全国学力・学習状況調査）が行われた。小学6年と中学3年の悉皆（しっかい）テストである。

このテストは多方面で物議を醸し、中でも学校別成績公表の是非論争は激しい。徳島県でも昨年度、石井町長が学校別順位をほのめかし、他県では実際に公表した例もある。文部科学省は成績の学校別公表は認めていなかったが、今回実施分から条件付きながら認めると方針を転換した。

今、世界で注目されている学力調査は、経済協力開発機構（OECD）による生徒の学習到達度調査（PISA）になる。現代社会を生き抜く力の中核とされた諸能力の知的側面を測る国際比較調査だ。その2003年調査の結果が日本の教育界に衝撃を与えた。読解力の国別順位が8位から14位に落ちたのである。

文科省は学力低下を認め、ゆとり教育から学力重視へと舵（かじ）を切った。全国学力テストはその一環である。テストは国語と算数（数学）が対象で、試験Aは基礎学力、BはPISA型学力を意識した応用力の検査である。

PISA型では、教科横断的に実生活で機能する知識や技能の獲得を目指す。テスト結果の比較があらわになるので学校側は過敏になる。日本でも、試験中に教師が答えを教えるなどルール度外視の不正が続出した。

全国学力テストの先行国はイギリスで、学校別の成績も明示される。当時のサッチャー政権が始め、日本もこれに追随したのであろう。テスト導入の結果、危惧された問題が生じ、逆に学力低迷を招いた先例としての検証は行われたのか。

この対極がフィンランドの教育になる。比較による競争などとは無縁に、子ども個人の水準と個性を尊重した少人数教育だ。OECDが模範の教育としPISAでも高い順位を維持している。

私は長年、「タイプA性格」について研究してきた。これは、他者を意識し、競争性が高く精力的に努力し、人への敵意や攻撃性が高まった性格だ。この性格は生活上多面にわたり問題をもたらし、至福に満ちた生涯を損なう。

その競争性の高まりは、学力に何をもたらすのか。この領域の研究から言えば、PISA型学力を落とすことになるだろう。単に知識を問うテストには強いが、創造力や試験Bで問われるような応用力は弱い。見かけ上、学校間の競争が試験Bの得点を上げるかもしれない。しかしその高まりは、テストに解答するこつに習熟しただけの場合が多い。

誰もが子どもの行く末に幸あれと願う。それは、競争を促す教育姿勢からは到底達成できない。別の国際比較では、日本人の幸福感の低さが指摘されている。「教育とは何か、学力とは何か」、再考の時期を迎えている。

本ファイルの著作権は徳島新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。